

特集 地域特産作物

IV 紅花【産地の取組】

日本の紅(あか)をつくる町 ～紅花生産日本一、白鷹町～

山形県白鷹町産業振興課 課長補佐 吉村 秀昭

1. はじめに

・町の紹介

白鷹町は山形県南部に位置し、町の北東に白鷹山(994m)がそびえ、そこから丘陵が連なり、三方を山に囲まれた盆地を形成している。中央部を山形県の母なる川「最上川」が南北に流れている。

気候は、内陸的特性を帯び、平均気温は10.4℃、平均降水量は1,546mm、積雪量は平たん地で24.6cm、山間部の多いところでは1mを超える地域もある。

人口は1万5千人余りで、第一次産業10.5%、第二次産業39.8%、第三次産業49.7%の割合となっている。(2010年国勢調査)

観光については、大型バスによる通過型の観光から、個人や小グループによる滞在型・体験型観光に移行してきている傾向にあり、動向としては、立ち寄り型の観光が主流となっている。「春サクラ。夏はベニバナ、秋はアユ。冬は隠れ蕎麦屋のしらたかへ。」をキャッチフレーズに、観光4シーズン化の事業展開などにより、東日本大震災前の数字に近づきつつある。

2. 最上紅花について

・紅花の歴史

白鷹での紅花生産の歴史は古く上杉家の文書「邑鏡(むらかがみ)」には、置賜領内最大の生産地であると記されている。しかし、第二次世界大戦時代には、食糧増産のため、町でも県内でもその栽培が途絶え「幻の花」となってしまった。戦後まもなく山形市で紅花栽培が復活し、昭和29年にNHKが全国的に「郷土の花」を選定した際、山形県では「べにばな」が選ばれており、また県を象徴する花として親しまれていたことから、昭和57年3月31日山形県花として制定された。



・生産状況

平成27年度に白鷹町で県紅花生産組合連合会へ出荷したのは24名(団体含む)で約4haの栽培面積である。また、生産量は142kgで、県内の62.8%のシェアとなっている。(山形県紅花生産組合連合会調べ)

白鷹町では、昨年、一昨年と7月の収穫時に豪雨に見舞われ被害を被った。しかし、生産者が懸命に花を摘み、加工し紅餅をつくった。それは、全国に紅花を必要としている人がいるからだとのことである。

本町で本格的な紅花栽培がおこなわれたのは平成に入ってからであり、平成3年から紅花を栽培し、当町の紅花生産者で組織する「白鷹紅の花を咲かせる会」の事務局長であり、県紅花生産組合連合会副会長の今野正明氏は、紅花栽培のリーダーとして、紅餅等の紅花栽培加工技術の伝承活



動を行っている。山形県内の紅花づくりの牽引役として手腕を奮っている。

紅花畑は、紅餅や乱花の生産だけではなく、観光としての一面も担っており、「紅花摘み猫の手隊」と銘打って、紅花摘みの体験ができる畑を提供するグループもある。これは観光協会と提携し、より多くの方に紅花摘みを体験してもらおうというもので、初夏の早朝5時前後からツアー客や近隣住民の方などが紅花畑で花摘みを行う。摘み取り体験をした方には収穫量に応じて謝礼を渡している。摘み取り体験を通して、さわやかな夏の朝を感じ、機械化が難しいとされる花摘み作業から、古の先人たちへの思いを馳せることができる体験である。



3. 町のとりくみ

(1) 観光としての紅花

・紅花まつり

白鷹町での紅花まつりは、「もう一度紅花の咲いている風景が見たい。見せたい。」という町民グループ（白鷹紅の花を咲かせる会）の取り組みか



ら始まった。

今年で21回目を迎え、紅花に親しむ機会としての「紅花まつり」の開催も確実に生産者の増加につながってきたと考えられる。今では、町をあげての「しらたかの初夏のまつり」として定着している。

・紅花 colors

山形デスティネーションキャンペーンの誘客事業として3年前から取り組んできたのがべにばなアート展「紅花 colors」である。これは、東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコースによる紅花をテーマとした多彩なアート作品の展示や、紅花染め体験、観光インフォメーションなど、町文化交流センターを会場に約1か月間開催するものである。毎年恒例となった「やまがた舞子」の演舞や「紅花 colors パンまつり」では大勢のお客様で賑わいを見せている。今年は、劇団I'M（アイム）による詩劇「花はくれない」の公演が行われ、山形の紅花を題材とした芸術に触れることができた。

・紅ランチ

紅花 colors に合わせて行われているのが、紅ランチの提供である。これは町産の紅花をふんだんに使った特別メニューを、町内の鷹野湯温泉パレス松風と道の駅白鷹ヤナ公園あゆ茶屋が期間限定で販売するランチである。紅ランチ発表会ではやまがた舞子の演舞も披露され、ツアー客を楽しませている。



・山形銀行本店への紅花展示

観光としての紅花イベントは、山形銀行本店を会場として開催している「白鷹紅花まつり展」から始まる。銀行の入り口やロビーは白鷹の紅花一



色となり、紅花染めの打掛やパネルなどを展示し、山形県内外へ白鷹の紅花シーズンが始まったことを知らせる絶好の機会となっている。

(2) 生産者への支援

平成23年度に町内産業の振興を図るため、町、農協、商工会、観光協会、酪農協、一般財団法人アルカディア財団で組織する「白鷹町産業振興戦略会議」が設置された。白鷹町の農業・工業・商業・観光の連携により、白鷹の特色を活かした産物を県内外へ発信していこうというものである。その中で、白鷹は紅花生産日本一であることから「紅花」、さらには搾乳量が県内一であること、また米沢牛の生産地であることから「牛」を主力品目としての取り組みを行っている。

紅花の生産者に対する支援は、平成24年度から実施しており、当初は観光紅花という視点が強かった。作付面積に応じで助成金を交付していたが、近年は紅花生産量を重視する内容としての制度設計をしている。これは、紅花生産日本一であり続けることが、観光面においても、キャッチフレーズや話題性の点でも期待できることが大きいと考えるからである。観光にとって「日本一」というキャッチフレーズは、最大の武器となる。

紅花の出荷は山形県内の各生産者が一堂に会



し、山形県紅花生産組合連合会が行っている。会場では品質の高い紅餅や乱花に注目が集まり、その技法などについて常に関心事となっているようである。

産業振興戦略会議では、紅花栽培や、品質の高い紅餅、乱花の生産に向けて、生産者会議を実施している。県の西置賜農業技術普及課や前記の今野氏の協力を得て、連作障害への対応や、畑作りに関する勉強会を実施している。また、生産者同士も、種の下準備、播種の時期などについて熱心な情報交換が行われている。

4. 課題

・連作障害

紅花の栽培・生産にとって課題となるのが、連作障害である。紅花の場合、3～5年位で連作障害の影響が出てしまう。有機物の投入による土壌改良や土づくりを図り、毎年同じ場所での栽培に成功している生産者もいるが、ほとんどが、輪作により対応している。生産者会議でも土壌づくりが関心事の一つとなっている。

・生産者の高齢化

「白鷹紅の花を咲かせる会」が発足して21年が経過し、生産者も次第に高齢化が進んだ。今後も紅花生産を継続していくうえで、後継者不足が心配される。それには、さまざまな要因が考えられるが、紅花の販売価格は10aあたり15～30万円位で、摘み取りや紅餅への加工を考えた場合、他の生産物よりも利益を上げにくいことも一因と考えられる。

5. 今後の取り組み

国では地方創生の施策の中で、安定した雇用創出、地方への新しい人の流れ、少子化対策、地域間の連携を掲げており、本町においても様々な視点から計画を策定して取り組んでいくこととなる。その中で、生産量日本一の紅花に着目し「日本の紅（あか）をつくる町」をキャッチフレーズに、生産量の増大や観光振興への有効活用など更なる磨き上げを図っていかなければならないと考える。